


A scenic landscape featuring a wide river flowing through a lush green valley. In the foreground, a dark metal railing of a bridge spans across the river. The background shows rolling green mountains under a bright sky. The text is overlaid on a semi-transparent green rectangular area in the center.

令和5年度 第73回高知県芸術祭

第52回
高知県文芸賞
入選作品集

高知県芸術祭執行委員会



令和5年度 第73回高知県芸術祭

第52回
高知県文芸賞
入選作品集

高知県芸術祭執行委員会

もくじ

〔短編小説〕

高知県文芸賞	またね	吉岡 稚菜	1
高知県文芸奨励賞	草原の絵葉書	永野和美	6
佳	庭作	田中健二朗	11
佳	結婚の木の	川村智保	16
	は	安藝友知史	21

〔詩〕

高知県文芸賞	ふるさと流星群	童眼 まさみ	27
高知県文芸奨励賞	染めの浴衣	おおたに あかり	29
	柿色の浴衣	赤井紫蘇	31
	繕う	都築悦子	33
	ポコちゃんたんじょうび	栗山文子	35
佳	泣いたやぎ	浜田健夫	37
佳	九十五歳の挑戦	宮本泰子	39
	空蟬のよう	宮地令子	41
	虹の葉	大野充彦	43
	言の葉	青野紀代美	45
	アサガオ	甫木恵美	47

〈短歌〉

高知県文芸賞	西原時子・多田蓮・土居修	廣見正子	49
高知県文芸奨励賞	高橋ひかり・池田育子		49
佳作	松岡美代子・中山恭子・浜崎萌々香		51
	山下和代・大和田奈都		

〈俳句〉

高知県文芸賞	澤村正彦・田村乙女・田村土木	川戸右京	53
高知県文芸奨励賞	山崎葉・鈴木優那		53
佳作	栗坂海馬・藤原佳代子・露口奈津子		55
	駒木基克・中平キリン・徳廣由喜子		
	山崎鈴子・尾崎淳・小笠原龍一		
	川原夏梨		

〈川柳〉

高知県文芸賞	大野早苗・渡邊ゆかり・岡林裕子	山岡陸宏	59
高知県文芸奨励賞	富士田三郎・池瑞依		59
佳作	近藤真奈・藤村るみ・大野充彦		61
	森乃鈴・明神永子・山崎光子		
	森下菊・辻内次根・渡邊和弥		
	北之園心咲		

〈審査評〉

〈作品募集要項〉

審査評	65
作品募集要項	70

短
編
小
說

またね

高知市 吉岡 稚菜

雨の降る音が聞こえる。そう感じて目を開いた。屋内にいるときに聞く窓や壁や屋根に雨が打ちつけるようなそんな音。それなのに視界に広がったのは目が眩むほどの光と、徐々に瞳孔が絞られてピントが調節された緑豊かな風景。いまこは天気の良い昼下がりで、私は小高い丘の中腹に足を組んで座っている。ショートパンツから覗く剥き出しの太ももが日射しを反射して発光するかのように白く眩しい。冷気をわずかに含んだ風が背後から何度も吹き抜けては、緩やかな斜面に座る人々を通り越し、丘一面の芝を撫で、土地を横断して流れる川の水面を戯れるように駆けていく。

夏の終わりが近い。そう空気が伝えてくる。そ

こで、ふと違和感を覚える。いまは梅雨の最中でこれから本格的な夏が始まるはずなのに。それに足先にはもう何年も前に捨てたはずのキャンバス地のスニーカーを履いている。

ゆつくりと、それが当然の流れであるかのよう
に、顔を横に向けて隣を見る。そこには、ジウが
いた。ジウは俯きながら、時には遠くを見やりな
がら、ずっと何かを話している。それなのにジウ
の話し声は一切聞こえてくることなく、私はただ
黙って彼の横顔を見つめながら、心の中でジウ、
ジウと呼んだ。するとジウは困ったような笑顔で
こちらに振り向き、また何か言おうと口を開く。
そのとき再び雨の音が響きます。私は雨音のなか
でジウの無音の言葉を聞こうとする。雨は弱まる
どころか勢いを増し、次第に視界が暗く狭まって
いく。意識がその場から遠のいていくのを感じな
がら、どうして、と闇に向かって呟く。ジウ、ど
うして。

次に意識が辿り着いた先は、雨が滝のように降

る早朝の日曜日だった。薄暗く湿気の多い部屋の床には寝転んでいる。隣で眠る子供と夫を起こさないよう気を付けながら、二人の寝息を横切りそつと部屋を出る。

あの丘に座っていたのは大学生の頃の私だ。二年生のときに交換留学制度を利用してオーストラリアのメルボルンに留学していた。キャンパスがある街中を少し外れた場所にあの丘は広がっていて、よくお気に入りのスニーカーを履いて柔らかな芝を踏んだ。いつも隣にはジウか、テヨンがいた。私だけが日本人だったけれど、三人でいるとよく韓国人に間違えられた。大学の敷地にある寮へと続く道の途中で、私とテヨンは女子寮へ向かうためにジウと別れなければならなかったけれど、一人男子寮へと続く道を歩くジウの背中をよく二人で見送った。

私たちはいつも一緒にいた。どんな理由にしろ、遠い異国において唯一心を寄せられる存在だったから。

足音を忍ばせながらリビングへ向かい、ペー

ジウのカーテンを開けて鈍い光を部屋に満たす。湿気とうつすらと掻いた汗のせいで、パジャマが肌張りつくのを感じる。押し入れから取り出したばかりの扇風機の電源を入れて、ソファに座ってしばらく生温い風を浴びたあと、コーヒを淹れるためにキッチンへと向かう。インスタントの顆粒に熱湯を注ぎ終わると、カップを持って再び元の位置に座る。

暑い日に熱い飲み物を飲む理由が分からないと、テヨンは言っていた。末端冷え性だから、なるべく冷たいものを摂らないように気を付けているのだと話すと、彼女は私の手を握り「ホントだ、冷たい」と言って笑った。そして私の両手をまるで雛を孵そうとするかのように真剣に自分の掌で包み込んだ。彼女の手は温かった。伏せた瞳を縁取る睫毛と、一つの塊になった掌を交互に見ながら、目の前の光景に思わず微笑んでいた。私の両手は依然として冷たいままだったけれど、日常生活のなかでふとその冷たさを意識するとき、この日の彼女の真剣な眼差しと掌の柔らかな

感触を思い出す。そしてその温かさに、やはり笑みが零れるのだった。

そんな彼女から約半年ぶりに連絡があったのは二日前のことだ。チャットのアプリでお互いの近況を確かめ合ったあと、テヨンは三十分ほど時間をおいて私にこう告げた。

ジウが亡くなったと。

彼は実家のある釜山ではなく、一人暮らしをしていたソウルの自宅で両親によつて発見されたと。すぐに病院へ運ばれたけれど、もう手遅れだったと。葬儀はすでに終わっていると。そして連絡が遅くなつてしまい申し訳ないと、最後にそう書かれていた。

ジウ、また明日ね。お互いの寮へと続く分かれ道でジウの背中を見送るとき、私とテヨンはそう言つて声をかけた。木々に西日が射す夕暮れ時や、街灯に影が伸びる夜更け前のことだ。あの頃は、また明日という言葉に何の疑念も抱かなかった。留学の定められた期間が終わわり、先に私が帰

国することになつても、空港へ見送りに来てくれた二人とは当然のように「またね」と挨拶を交わして私たちは別れた。またね。それは、再会を願う言葉。約束のようできて約束ではない。叶わない可能性が常に付き纏うのを承知で、時にはそれを利用しながら、嘘にも願ひにも変わる言葉を別際に託し合う。

日本に帰国したあと時間は慌ただしく過ぎていった。就職活動をしなが卒業論文を書いた。大学卒業後は人材派遣会社に就職し、いまの夫と出会つた。その翌年には妊娠が発覚した。職場を退職し籍を入れて無事に出産を終えたあとは、社会と切り離されたような環境で子供を育てている。子供は最近手を振ることを覚えた。バイバイ。それもまた別れの言葉だ。

あの時、私たちの「またね」に嘘はなかった。たとえ思うように人生が進まなくても、同じ時間軸を進んでいるのだから、その気になればいつでも会えると思つていた。別れた直後と同じくらいの恋しさがずっと続いていくものだと思つてい

た。でも、それは違った。頻繁に取っていた連絡は月に一度から半年に一度、お互いの誕生日を祝い合うだけの頻度になった。前回ジウとテヨンに連絡したのも二人の誕生日だ。お祝いのメッセージを送り、簡単に近況を報告し合う。どこまでも当たり障りのない会話。

そんな中、突然届いたメール。

身近な人間の死を経験するのは初めてだった。死によって周囲の人間が粉々に打ち砕かれていく様を知ってはいたけれど、ジウの死の報告を受けたとき、その激しい波が自分にどのように襲い掛かってくるのか未だに分からなかった。事実には衝撃は受けたけれど、冷静でいられる自分により大きな衝撃を受けた。ジウの死が私の人生に干渉しない距離まで、私たちは遠く離れてしまったのだと思った。同じ時間軸を進んでいたように思えたけれど、二つの存在はそれぞれ別の方向へと歩みを進め、慣性の法則に従い再び元の位置に戻って来ることはなかったのだ。そう考えていた矢先、衝撃は時間をおいて波を連れて来た。まるで津波

のようにゆっくりと。私は波にのまれて夢を見た。

あの日、テヨンは前日の試験の提出物に不備があり、担当教授に呼び出しを受けていた。次の講義まで三時間ほど時間が空いたため、学食ではなくどこか別の場所で昼食を食べようと話をしていた時だった。校門を出る直前にテヨンの携帯が鳴り出し、彼女は慌てた様子で来た道に戻って行った。取り残された私とジウは、結局いつもの溜まり場へ向かうことを決め、道中見つけたコンビニで三人分の昼食を買った。

なだらかな丘には、私たちのような学生や小さな子供を連れた家族がいた。テヨンに居場所を知らせるメッセージを打ったあと、丘の中腹に座り私たちはコンビニの袋から中身を取り出した。私はサンドウィッチを。ジウはパスタを。柔らかな時間だった。不穏な影など何ひとつなかった。丘で時間を過ごしながら、テヨンをずっと待っていたけれど、現れる様子はなかった。しばらくして

ジウは突然こちらを振り向き、それまでの他愛もない会話とは違った様子でこう言った。

「留学するために毎日勉強をして、もちろんいまでも欠かさずに勉強をしている。その度に思うよ。この世界は知っても知っても知り尽くすことがないって。自分はいま何も分かっていないということとを、学んでいる途中なんだって。」

ジウはそう呟いたあと、困ったように笑っていた。私はその言葉に対して簡単に相槌を打ち、ただ笑い返しただけだった。何故いまになってジウのこの日の言葉を思い出したのだろう。夢に見るまで記憶の片隅に葬られていたはずなのに。でもきつと、私はジウに問うていたのだと思う。ジウの死を知ってからずっと。ジウは何を知ってしまったのかと。私たちが自覚ないままに別々の道を歩みはじめたあと、どんな事実が死を選ばせてしまったのかと。

私は持っていたコーヒーを机の上に置き、代わ

りに携帯を握る。そして三人のグループチャットをひらく。いつのやりとりを見ても「また」という言葉で溢れている。いつだって私たちの関係はこの言葉で締め括られてきた。たとえ再会が叶っていたとしても、別れ際にはまた再会を願ったことだろう。それは絶えることない願い。

カーソルが点滅している空欄に、会いたい、と打ち込む。

会いたい。

その一言をしばらく眺める。

そして、冷たい指で、一文字一文字ゆっくり消去していく。

草原の絵葉書

高知市 永野和美

夜の空港は人影もまばらで静かだった。私はロビーの椅子に座り母の乗った最終便の到着を待っていた。八十歳になる母は昔から明るく前向きな人で、この年になっても物怖じすることなく一人で旅を楽しんでいた。

「あなたも仕事ばかりでなく、もっと人生楽しんでだら？」

母は会うたびにそう言うが、社交的な母とは正反対の私は一人家で本を読むことの方が性に合っていた。

「あと、もう少しで着くわね」

と、到着時刻を示している掲示板を見上げた時、飛行機の到着が遅れるというアナウンスが流れた。「三十分も」とため息をつき、バッグから

読みかけの本を取り出した。

「参ったな」

後ろから男の人の声が聞こえた。とっさに振り向くと、二歳ぐらいの女の子を膝に抱いた男性と目が合った。

「お子さん連れだと三十分は長いですね」

と、声をかけ、会釈をして前を向いた。するとその男性が私の椅子の横に立って、

「あの。智君のお母さんじゃないですか？」

私は急に声をかけられて戸惑った。

「智？ 智也？ えっと、あなたは？」

「あっ。突然すみません。僕、智君、いえ西森智也君と小、中学校と一緒だった谷本健二です」

「たにもとけんじ君？」

私は昔の記憶を辿った。そう、智也の同級生に健二って子がいた。ああ、あの健二君だ。

「いつも智也を誘いに来てくれていた健二君？」

「はい。そうです」

そう言って笑った顔は毎朝元気いっぱい「おはよう」と、やって来る健二君だった。もうこんな

に立派な大人になって、しかもこんなに可愛い子のパパになつてゐるなんて。

「今日はどなたかのお迎え？」

二人を交互に見ながら聞くと、健二君は女の子におもちゃを持たせながら、

「妻が県外の友人の結婚式に行つてまして。お母さんは、智君の迎えですか？」

私は母親の迎えであることを伝えた。

「そうだ。智君、大学を辞めて農業始めたんですよ。聞いたときはびっくりしました」

智也は健二君に話していたんだ。今でも二人は親しくしているのだろうか。

「それで、智君、元気でやっていますか？」

そう聞かれて少し間が開いて、

「ええ。智也は元気よ」

小さい声で私は応えたが、本当は元気かどうか知らなかった。次に続く言葉を探していると女の子がぐずりだした。

「すみません。ちょっと寝かせてきます」

健二君は慣れた様子で女の子を抱き上げ人の少

ない静かな方へと歩いて行つた。一人になり目を閉じると、智也の顔が浮かんだ。

私たちは母ひとり子ひとりの家族だった。私は小学校の教師をしていたので経済的には困らなかつたが、頼れる人が近くにいなかったの全て一人でしなくてはならなかつた。幸い智也は保育園の時から手のかからない子だったので助かつた。そんな智也は周囲から「智君、いい子ね」「素直で賢い子ね」と誰からも褒められ、私も「本当に子育て上手よね。一人で偉いわね」と言われた。こうして智也は何の問題もなく、小、中学校、高校と進み県外の大学に進学した。私は、智也はこのまま大学を卒業し、地元に戻つてきて教員か公務員になるものゝと思つていた。そう、それが一番いいと。

なのに、大学四年の春。

「母さん。僕、大学を辞めてきた」

と、突然言われた。その日は、私の勤める小学校の入学式で朝からバタバタしていた。

「何言つてんの？ 馬鹿なこと言わないで。忙

しいのよ。朝から冗談やめてよね」

笑って私は出かけた。でも、一日中、智也の言葉が気になり仕事が終わると急いで家に帰った。智也は夕飯を作って待っていた。

「おかえり」

いつもの智也の様子にホツとした。着替えをしてご飯をよそいながら、

「ねえ、今朝のあれって何よ」

と言った私の言葉は、自分でもハツとするくらい強い口調になった。智也は私と向かい合って座り、真っ直ぐ私を見て、

「大学辞めたんだ。やりたいことがあって。農業をやる。長野に行つてね」

静かに普通に喋る智也に対して、

「何それ？ 大学を辞めたつて？ あと、一年だよ。なぜ今なの？」

「だめなんだよ。今、やりたいんだ」

私は智也が何を言っているのか、何がだめなのか理解できなかった。そして、次に私の口から出た言葉は、

「一人で大きくなったんじゃないのよ。一人で全部決めないでよ。どうして母さんに何の相談も無しなの？」

私の感情の高ぶりとは反対に智也はとても落ち着いて、

「母さん。もういいだろう？ 僕が一人で決めても」

と言つて隣の部屋に入ってドアを閉めた。

その時、私は気付いた。そう、今までの智也の人生、全て私が決めてきたことに。小学生の時のそろばん塾やスイミングスクールに通つたこと。中学校での部活を私と同じテニス部にしたこと。高校の志望校も大学も。智也は私が「こうしたら？」と言つと、いつも「いいよ」と頷いた。

私は今まで智也の何を見てきたのだろうか。この子の気持ちを聞いたことがあったのだろうか。そう思ったのに、

「そんな勝手なこと。私は許さないからね」

閉まったドアに向かって言つた。その言葉に応えるかのようにドアがスツと開いて、

「そうだよね。母さんは、きつとそう言うと思っ
ていたよ。あのね、母さん……」

私は智也の言葉を遮って、

「もういい。好きにしたらいいわ」

乱暴に言葉を投げつけた。智也はもう何も言わ
ず足元のスーツケースを持ち上げ、

「母さん。長野に行くね。手紙書くからね。体
には気を付けてね」

と、静かに玄関を閉めて出ていった。私はそん
な智也が許せなかった。もし、許してしまえば今
までの智也との生活の全てを私は後悔しなくては
ならなくなる。そう思うと怖かった。

それからしばらくは、智也から私を気遣う手紙
が届き、私も当たり障りのない内容で返事を書い
た。そんな他人行儀なやり取りも長くは続かず手
紙は来なくなった。なぜ、住所もわかっている
のに会いに行かないの？と、私の中の私が何度
も私に尋ねた。でも、会いには行かなかったし、
手紙さえも出さなかった。あんなに「いいお母さ
んね」と周りから言われていたのに。そんなのは

全部偽りの私の姿だ。本当の私は、こんなにも冷
たい母親なのだ。いつからこんな母親になってし
まったのだろうか。そう、昔からずっとそうだっ
た。自己満足と世間体だけで智也を育ててきた。
多分、智也は私がそんな母親だと、とうの昔に気
付けていたのだろう。でも、あの子は優しい。だ
から母親が傷つかないようにと私には「いいよ」
と言ってきたのだろう。

急に涙が溢れそうになった。なに？どうした
の？何で今、泣くの？と自分の涙に戸惑った。

「あなたに会いたい。今すぐ会いたい」

それは、心の思いを絞り出すような私の声だっ
た。聞きたい。なぜ大学を辞めて農業だったの？
私との二十四年間は幸せだったの？不幸だった
の？私は、あなたの母親としてどうだったの？い
いえ。違う。私は、そんな事を聞きたいんじゃない。
ただ、二年前のあの時あなたが、

「あのね。母さん……」

と、言ったその先を聞きたい。そうしないと私
たちはいつまでもこのまま。私はもう嫌。あなた

を失ったようなこんな気持ちを抱いて暮らすのは。今ならあなたの全ての話を聞ける。

「会いたい。智也に」

私は声を押し殺し帽子を深くかぶり泣いた。

周りがざわざわと動き出した。気付かなかったが到着のアナウンスが流れていた。顔を上げると健二君が眠っている女の子を抱いて歩いてくるのが見えた。急いで涙を拭いた。

「やっと到着しましたね」

「お疲れ様。もうすぐママと会えるわね」

私は眠っている子の頭をそつと撫でた。

母がゲートから出てきた。私は健二君親子に手を振って別れた。

「あの人、誰？」

母に聞かれたので、智也の友だちだと応えた。すると、

「あなた、智也のことと思って泣いていたでしょう？」

と、顔を覗き込まれた。何も言えず黙っている

「ちよつと、これ持ってた」

母は私に旅行鞆を持たせ、いつも持ち歩いているバッグから赤い紐で結んだ紙の束を取り出した。

「こんな所で渡すとは思わなかったわ。二年分の智也からの手紙。はい。渡したわよ」

そう言っつて、葉書の束を私の前に差し出した。一番上に草原の絵葉書が乗っていた。母は葉書を受け取った私の手に自分の手を重ね、

「あのね、智也がね。僕の気持ちをお母さんがわかってくれた時、渡してつて。あなた。今いいお母さんの顔してるわよ」

私は、また涙が出そうになった。

「だめだめ。今泣いちゃだめ。涙は智也の葉書を読む時までおあずけよ」

そう言っつと、母は幼い子どもを抱くようにそつと私を抱きしめた。

庭

高知市 田中健二朗

淡い橙色の陽が錆び付いた自転車に射している。市街地から少しはずれたその商店街に人影はなく、消えかけた横断歩道の白線を、家路を急ぐ軽自動車が横切った。

「ヘモグロビンはそこで何をしようと思う？」

英介は歩きながら少し考えて「さあ」と首を横に振った。「なにをしよう？」

紗耶香は視線を落として笑みを浮かべた。夕日に染まったその端正な横顔に、英介は一瞬目を奪われた。煙草屋のブリキの看板の前を通り過ぎる。

血液の細胞である赤血球は、ヘモグロビンと呼ばれる蛋白質の鎖をもっている。ヘモグロビンは肺で酸素をとらえて血流にのって移動し、末梢の組織でそれを手放す。彼女の話によると、その血

液の酸素運搬体として知られてきたヘモグロビンが最近、神経の細胞である一部のニューロンでも産生されていることが分かったという。ではそれらのニューロンはなぜ、なんのためにヘモグロビンをつくっているのか。

「わからないの。世界中のまだ誰も」

これが、英介からの「大学の勉強は楽しい？」という質問に対する彼女の答えだった。

「それって分かったら儲かるの？」

精密機器メーカーに勤める英介はそう口に出すと同時に、その発想の俗っぽさを自覚して笑ってしまった。紗耶香がしているのはそういう次元の話ではない。何かが分かったら、今度はその先のまだ分かっていない何かがあることに気づかされる。彼女はもつとシンプルに、学問を楽しんでいるのだ。

「わかんないけど」と、しかし紗耶香は真剣な眼差しで言っただけで立ち止まった。閉じた店の軒下をそろりと歩いて路地に入ると、彼女は唐突に「にゃーお」と鳴いた。コンテナの陰から黒い猫

がのっそりと姿を現す。

「野暮だったね」

と英介が言うのと、紗耶香はこちらを振り向いてバットを振る真似をした。

「大谷の空振りみたいなものじゃない？ もし儲からなくても」

英介は「なるほど」と言っておきながら、首をかしげて歩き出した。紗耶香は英介に追いついて並んで「いややっぱ藤浪のあれか、160キロのフォアボールか」と言った。声も、横顔も、母親にそっくりだ。

妻・千鶴の癌が最初に見つかったのは肝臓だった。もともと臍臓にできたものが広がって肝臓に達し、腫瘍となっていた。紗耶香が小学生になるからと、菜園場に家を建てて引越した年だ。

「お庭で紗耶香とランチするのが夢なの」

千鶴がそう言って工務店のパンフレットを見せってきた時、英介は新しく買ったゲームソフトをプ

レイするのに夢中だった。千鶴は構わず、よさこいも通るしどうのこうのと喋り続けている。彼女は小学校で教師として忙しく働いていたが、出産を機に「他人の子供の面倒まで見れるか」と言い残し退職した。そんな彼女の勢いは止まらず、マイホーム計画は猛スピードで進められた。千鶴は土地探しに奔走し、ママ友たちの家を見て回った。リビングが何畳で、土地の相場はどうこうでと余念がない。英介のゲームは、一度は敵対した伝説の英雄が仲間に加わり、いよいよ本格的に世界を救う旅が始まろうとしていた。

不動産屋に連れられて向かった菜園場の土地は長細く、庭が欲しいという千鶴の希望を叶えるには不向きなように感じられた。英介は工務店の営業で設計士でもある中村の表情を窺う。千鶴との雑談を弾ませる不動産屋とは対照的に、三十歳独身の中村は妙に落ち着いていて口数は多くない。そんな彼が「問題は庭ですな」などと口走るの

で、千鶴は分かりやすく落胆した様子だった。英介はジャケットのポケットから紗耶香用の飴を二

つ取り出すと、「食べる？」と一つを中村に差し出した。薄暗い空の雲の切れ間からはいくつかの光の筋が漏れていた。

中村から連絡があったのはその翌週の水曜日だった。英介と千鶴がオフィスを訪ねると、テールには家の図面が広げられていた。見ると二階建ての長細い家の中程が小さくコの字型に切り取られ、1・5坪の何もない空間がつくり出されている。

「中庭……」

と千鶴が呟くと、中村は上品な笑みを浮かべて頷いた。

「ここはお子様が進んだり植物を育てたりと庭として使っていただけですが、もうひとつ」と言つて、中村はその庭に面したりビングにあたる区画を指ですつとなぞった。「奥の閉ざされかねなかった空間に光と風を導いてくれます」

中村の視線に、千鶴は輝くような笑顔を覗かせた。京都の町家で生まれ育った中村はこのような造りの家を実際に見た記憶があり、今でも《坪

庭》と呼ばれてその建築の文化が残っているのだと教えてくれた。土地が長細いと鰻の寝床と呼ばれるように家まで長細くなり、奥に行くほど光が届かず風も通らなくなってしまう。坪庭は千鶴の希望を叶えると同時に、その隠れた問題をも解決していた。こうしてその数か月後には千鶴の理想の一戸建てが、菜園場に完成した。

千鶴は幸せだった。春にはランドセルを背負った紗耶香を送り出し、夏は庭に小さなプールを構えて水遊びをした。英介は暑いからと、鳴子を手で冷房の効いたリビングのテレビで高校野球の中継を見ていた。リビング階段の一段一段に、レゴブロックの前衛的な作品が置かれている。作者である紗耶香はプールでプラスチックの黄色いバットをぶんぶん振り回していた。カルピスが注がれたグラスの氷が溶けて、カランと音を立てた。

千鶴の癌が発覚したのはその秋だった。入院し、手術不能とされるとすぐに放射線と抗がん剤による治療が始まった。癌そのものの痛みに加え、薬の副作用による倦怠感や嘔吐との闘いが続

いた。千鶴は一度だけ、英介の前で「死にたくない」と言っただけ泣いた。やがてそれまで千鶴の病状を常に正直に話してくれた担当医の口からもう長くないことを告げられると、千鶴はほっとしたような表情を浮かべた。

「もういいかな」と千鶴は言った。

離れて暮らす千鶴の両親は反対し、取り乱した。英介は共感を示しながらもこれまでの過酷な治療の経過について訥々と長い時間をかけて話し、しかしはつきりと、千鶴の意思を尊重すべきだと諭した。そうして、緩和ケアと呼ばれる痛みを取り除くことに重点を置いた治療に切り替えることになった。

「お庭に秘密の種をまいたよ！」

紗耶香がいると病室が一気に明るくなる。千鶴は紗耶香の前ではよく笑った。体調がいい時は家に帰ることもできた。ダンボールで作ったお菓子屋さん。コンクールで賞を獲った土曜夜の絵。お母さんの分の、一番きれいに実ったミニトマト。千鶴が病院に戻らなければならない朝、紗耶

香は「行ってほしくない」と言っただけ泣いた。千鶴はそんな涙の雫をかたどったようなイヤリングをはずして、紗耶香の小さな手に握らせた。

「これあげる」

そう言っただけで、彼女は紗耶香を強く抱き寄せた。庭から入ってくる風がそっと、母と娘を撫でた。

大学構内のコンビニ前で紗耶香が手を振っている。穏やかな秋の日差しを受けて光沢を帯びた赤いマツダ車が停車した。英介の車だ。今日は午後から休講で、ランチと一緒に食べる約束だった。

ヘモグロビンの分解産物が脳のカンナビノイド受容体と結合することが、最近の研究で明らかになった。カンナビノイド受容体は大麻の成分であるマリファナが作用する膜蛋白質として知られ、痛みの緩和を含め様々な脳の機能に影響を及ぼすことが分かっている。すなわちヘモグロビンの分解産物は、脳内大麻だったのである。「ニューロ

ンがヘモグロビンをもっているのは、それを自前のマリファナとして使うためなのかもしれない」と、大学の先生が紗耶香の研究成果を紹介しながらラジオで語っている。それを使ってなにか薬でもできたら大勢の人を救えるのかもしれない。そしてたら大儲けだな、と英介は思った。空振りだって、次当たればホームランだ。英介はラジオを切って音楽をかけた。

紗耶香が生まれてすぐの頃、千鶴は「男の子が良かった？」と訊いたことがあった。

「ゲームと野球が好きなの女の子だっているよ。教えてあげればきつと……」

英介がそう言うのと、千鶴は顔をしかめて英介の肩を叩いた。

「子供は親や先生が指をさすのと逆の方を向きたがるものよ」

確かにそうだ。紗耶香は英介の言うことなどまるで聞かない。ゲームよりオシャレが好きだし、野球より猫が好きだ。ただ、だから安心もした。それはきつと千鶴が教師として見てきた多くの子

供たちと同じように、自分の人生を生きている証拠なのだから。

運転席の英介がロックを解除すると、紗耶香はドアを開けて助手席に滑り込んだ。

「なに食べる？」と英介が訊いた。

「この曲いいね」

紗耶香はそう言って白衣と組織学のスケッチブックを後部座席に放り投げると、進行方向を指さした。車はロータリーを滑らかに回って正門を出ると、国分川沿いを西へと向かう。カーオーディオからはナルバリッチの Sweet and Sour が流れている。紗耶香は窓を開けた。心地いい風がいつまでも優しく、母のイヤリングを揺らしていた。

合歡の木

長岡郡本山町 川村智保

庭から、高さ二メートル弱の苔生した石垣の下に、もう誰も手入れをしていない所為で茂った雑草から飛び出すように枝を広げた桑の木が見える。その先にも、無数に転がる石を避けるように伸びたススキが葉を揺らしていた。昭和南海地震が起きるまでは、この場所には小さいが川が流れていたのだと祖母が言っていた。だがその場所は、大きな川石がまばらに転がっていること以外、その名残をとどめるものは何もない。上流へと続く山一帯で大規模な土砂崩れがあり、川はその時に埋もれてしまったという。石垣が途中から裏山に飲み込まれるように埋まっているのは、その時に崩れた山土がそのまま放り置かれたからだろう。

祖母がこの家に嫁いだのはまだ十六、七歳の時だったと聞く。祖父はこの周辺の土地を所有していた裕福な家の次男で、結婚が決まった時に、ここに家を建てて本家を出たのだと祖母が言っていた。祖父には会ったこともない。結婚して間もなく出兵し、帰ってこなかったからだ。仏壇に飾つてある、小さく鮮明ではない写真に写っている祖父の姿は、とても成人した大人の男には見えないほど子供っぽい顔をしていた。この若さで戦争に行つたのかと思うと複雑な感情を抱いてしまう。若い頃の祖父の話を、祖母はあまり語ってはくれない。見合い結婚だと言っていたから、思い出も、そう多くはないのだろう。

その祖母が先月亡くなり、誰も住む者が居なくなったこの古い家も、解体することが決まった。祖母が実家に帰らず、この地で生活を続けたのは何故だろうか。子は出来なかつたそうだが、本家が養子をとって祖母に育てさせてまで、この家に祖母を縛り付けたその理由を知る者は、もう誰もいない。

「車が停まっちゅう思うたら、帰ってきちよつたんか」

声に振り向くと、家の角から顔を覗かせている男の姿があった。

「ああ、明日解体業者と打ち合わせするけ、一足先に中を片付けちよこう思うて」

「言うてくれたら手伝うたに」

「葬式の時も世話になったのに、そんなに甘えてばかりもおれん」

この近所に住んでいる川本秀平は、ちょうど歳も近いという理由から、祖母の家に来る度に一緒に遊んでいた子供の頃からの馴染みで、たまに祖母のところへ帰ってくると必ず顔を出し、飲みを誘ってくる。今日も「どうだ、飲みに行かんか？」と誘ってきたが、断ると露骨に残念そうな表情を浮かべた。酒好きな男なのだ。

「その木も切るんか」

秀平が顎をしゃくるように示した先には、一本の木が立っている。合歓の木だ。

「あってもえいかも知れんけん、解体の邪魔

になるような切らんといかん」

「そうじゃった、ちよつと待ちよつてくれ」

秀平はそう言うのと、玄関の方へ向かって走って行った。道路脇に停めてあるのだろう、遠くで車のドアを開け閉めする音が聞こえる。そうして、しばらくすると秀平は小さな箱を手に戻ってきた。

「お前に見せようと思うて」

「これ、何で」

渡された箱は桐で出来た五センチ角の小さい、黒ずんだ古い木箱だった。

「葬式の後、ゆつくり話す時間もなかったらう？やけ、言うの遅うなつて」

そう言うてから、秀平は合歓の木の傍に寄って行くと、指を差した。

「この、洞ほらの中にあつたがよ。見つけたのは優里ながやけん」

優里とは秀平の奥さんで、祖母を気にかけて度々訪ねてくれていた。祖母が倒れていたのを見つけたのも優里で、両親を連れて病院に駆けつけ

た時には話も出来ないほど泣き崩れていた。

「なんか、婆ちゃんからその木がすごい大事なんじゃないと聞いてちよつて、葬式の日、この木を見に寄ったんじゃない」

その時、洞の奥に紙切れのような物を見つけ引いてみると、それは切れ端ではなく積もった落ち葉に隠れた包み紙の端で、取り出してみると、油紙で何重にも巻かれたこの箱が出てきたのだそうだ。

「悪い、中は見た」

開けてみる、と秀平が言うので、箱の蓋に指をかけた。力を入れすぎると割れてしまいそうで恐る恐る持ち上げてみたが、先に開けた後だからだろうか、蓋はすんなりと開いた。

中には、掌に収まるほど小さな丸い鏡と、朱色の塗装が斑に剥げた櫛が入っていた。鏡は曇っていて何も映さず、櫛も歯が欠け落ちていた。

「あ、その櫛折ったの、俺な。すまん」

持ち上げた時に折れた、と秀平は頭を下げた。それに少しだけ笑って気にするなと答えてから、

蓋を閉じた。

「何でこんな物が？」

「たぶん、呪いまじなじゃないかって」

「呪い？」

「ああ。昔は嫁入り道具に鏡とか櫛とか持たされたんじゃないと。それを家の屋根裏とかに仕舞ってさ、家内安全の呪いに使ってた事があつたって俺は聞いたけど」

「誰に？」

「神主さん」

「いつ」

「あー、この箱開けた後。だって、ちよつと気味が悪いやろうが」

「まあ、確かに。でも、何で屋根裏じゃなくて木の洞なんやろうか」

「そりゃ、俺も知らん」

これを置いたのが祖母だったとして、何故家の中にではなく、庭の木の洞になど入れたのだろうか。しかも嫁いだ時にこれを入れたとするなら、この合歡の木は、地震で崩れた後、山から落ちて

きて偶然この庭に根をおろしたのだとばかり思っていたが、そうではなく、それ以前に、この庭に植わっていたという事なのだろうか。

そう秀平に話すと、

「そう思うのも無理ない。庭木に合歡の木植えた家らあ、見たことないけ」

と言つて木を見上げています。

屋根を遥かに超える高さに成長した合歡の木に洞などあつただろうか、まったく覚えがない。それにしても、よくこんな小さな洞の中から箱を見つけたものだと感じしながら掌に乗せた箱を見つめる。

「俺も、婆ちゃんから一つだけ聞いた話がある」

木を見上げたままで、秀平が口を開いた。

「婆ちゃんがまだ若い頃に、一回だけ、夜になつても葉が閉じんかったことがあつたんやと。地震が起こる前のことで、まだ、この木もそんなに高くなかつた頃やと」

秀平の話を聞いているうちに、何となく、その後の話は想像がついた気がした。

夜になると閉じる合歡の葉が閉じなかつたこと、そして、その後には届いた祖父の戦死広報。きつと祖母は、その不思議な出来事に祖父の死の知らせを連想してしまつたのだろうか。そして、家を建てた時に棟上げと一緒に屋根裏に仕舞つたこの箱を取り出し、木の洞に入れたのだ。

若くしてこの家に嫁いで一人、心細かつた祖母が抛り所としたのが、この合歡の木だったのでないだろうか。祖母が、祖父の魂が宿つていると信じてしまつた木があるこの家に留まり続けたのは、そういう想いがあつたのだろう。そして、この木を境に、祖母の家は地震による山津波を避けて残つたのだ。それも、祖母の心を強くこの家に根付かせたのかも知れない。

「切る訳にはいかんつたなあ」

そう言うのと、秀平も大きく頷いた。

「まあ、張り出した枝は切られるかも知れんけど、木は切らんでも大丈夫やろう。なんなら、その箱を元に戻しちよつたらえい。守つてくれる」

油紙など上等な物は家にないので、納戸に巻いて置いてあった障子紙で包んでからビニール袋に入れ、洞の中に戻し、箱の上に落ちていた枯れ葉を適当に被せて隠した。

「優里が言うには、合歡の木は夫婦円満の象徴なんじゃと。知っちゃったか？」

「知らん、初めて聞いた」

「この木は挿し木で増えるんじゃと。枝を切ったら、庭に挿したらどうな？」

「そうするか」

この木は、家が解体されたら枯れてしまうのだろう、とそう思う。何故なら、合歡の木の寿命は三十年と言われているのだ。その木が、今も立ってここにあることが、祖父の魂を宿しているのかどうかは兎も角、人智を超えた奇跡なのだから。

今年、ドラマ化がされて巷を賑わせているかの植物分類学者が今も生きていて、この木の存在を知ったら飛んでやって来るのではないだろうか、と想像すると少し面白い。

「ええ話で締めくくった事やし、これから飲み

に行くか？」

「行かん」

「そこはお前、行くって言えや」

そう言うってから秀平は、わざとらしく口を尖らせてみせた。

結婚とは

南国市 安藝友 知史

八月の土曜日、鉛色の空から、まだ雨は落ちてこない。妻の伸子は不安げな顔で、窓から外の様子を窺っている。ときおり吹く強い風が、庭の手毬の木を大きく揺らした。

私は居間のソファに座って、テレビの台風情報を眺めていた。

「夜のうちに通り過ぎるみたいだよ」
声をかけたが、伸子からの返事はない。まあ、いつものことだ。

しばらく外を眺めていた伸子は、台所の方に向かって歩き始めた。その途中で、

「美鈴が、お盆休みに帰るって」

こちらを振り向きもせずそう言った。

「あとで、雨戸を閉めておくよ」

私のその声は、去っていく妻の背中に届く前

に、湿った空気に溶けて消えた。

娘の美鈴は、母親とだけ連絡を取りあっている。大学に受かって一人暮らしを始めてから、しばらくは毎月のように顔を見せていたが、社会人になってからは、盆と正月くらいしか帰ってこない。

ソファから立ち上がり、さつきまで妻のいた場所から外を眺めた。ぽつぽつと雨粒が落ち始め、やがて激しい雨となった。灰色に煙る景色を眺めながら、私は深い溜息をつく。

盆休みに入ると、先日の嵐が嘘のように真夏の太陽が照りつけた。その日、美鈴は珍しく駅で拾ったタクシーで帰ってきた。いつもなら私が車で迎えに行くのだが。玄関を開けると、見知らぬ男が美鈴の隣に立っていた。

「佐久間です、初めまして」

男は無精髭の残る顔で、気のないような笑顔を作った。体格がよく、着ているジャケットが窮屈

そうだ。

「彼と結婚することにしたの」

来客用のソファに男と並んで座るなり、美鈴はそう言った。佐久間という男は隣でただ微笑んでいるだけだ。伸子は娘のその言葉に驚きもしない。きつと、事前に美鈴から聞いて知っていたのだろう。

「佐久間さんは、何のお仕事を？」

何も知らないのが自分だけだと思つくと、その質問も間抜けな感じがした。

「アウトドアショップを経営しています」

「へえ、経営者か。すごいなあ」

「いえ、小さな店ですから」

佐久間は、照れたように頭をかいた。美鈴も働いているから経済的に困ることはなさそうだ。そのあと彼は、美鈴のひとつ年上であることや、宮城県の出身であること、休みの日には色んなキャンプ場を巡つて、趣味のソロキャンプをしていること等を話してくれた。

「美鈴も一緒にキャンプへ行かないのか？」

「わたし、キャンプとか興味ないから」

会話が途切れるのを待つて、伸子が「皆で食べましようよ」と言いながら、佐久間から受け取つた土産の菓子を持って立ち上がる。

「運ぶのを手伝つてあげて」

美鈴に促され、佐久間が台所へ向かつた妻のあとを追う。部屋に残つたのは、私と美鈴の二人だけだ。蟬の鳴き声が、窓の外でサイレンみたいに響いている。

「良さそうな人じゃないか」

私が言うと、美鈴は乾いた笑みを浮かべた。その目尻に刻まれた薄い皺。それは正月に帰つてきた時、あつただらうか。思い出せない。そうやつて少しずつ変化していく娘の顔を見るたび、私は同じように年老いていく自分を自覚せずにはいられないのだ。

「式は、いつ頃の予定なんだ？」

「しないわ、籍だけ入れるつもり」

「どうして？」

美鈴は黙つていた。説明したところで理解でき

ないだろうという眼を、私に向けていた。が、諦めたように口を開く。

「私たち、共生婚をするの？」

「共生婚？」

「そう、共同生活婚。住むのは同じマンションだけど寝室は別、食事も別。たまに時間が合えば、一緒に外食することもあるけど。休日も彼は一人でキャンプに行くし、わたしも友達と買い物や旅行へ行く。一緒に暮らすけれど、お互いが自由で自分のしたいことをするの。それが、共生婚」

「事実婚」や「同性婚」といった言葉は知っていたが、その言葉を聞くのは初めてだった。時代とともに結婚の形も多様化しているから、今はそんな考え方もあるのだろう。だが、ひとつだけ疑問がある。共同生活をするだけなら、なぜ結婚という形に拘るのか。

「もちろん彼のが好きだし、彼となら一緒に暮らしていけると思ったからよ」

「同棲じゃだめなのか？」

「わたし、三十代のうちには結婚しておきたいの。友人たちもみんな結婚しているし、そのことで、気を遣われるのも嫌なのよ」

佐久間は次男だが、公務員である長男はすでに結婚している。両親は厳格な人間で、次男が好き勝手に暮らしていることが、以前から気に入らなかつたらしい。長男に二人目の子どもができてからは、なにかにつけて「お前も早く結婚しろ」と言うようになった。だから、わたしと彼は結婚に対する価値観が似ているの、と美鈴は言った。

「子どもは？ 欲しくないのか？」

「今は欲しいとは思わない。わたしも彼も、好きなことをしたいから」

愛する人と家庭を築き、時には自分より家族を優先し、お互いが支えあつて生きていくこと、結婚とはそういうものだとは私は考えていたが、二人にとってはそうじゃないらしい。一緒に生活しながら、それぞれが独身のように自由に生きていく。そのための土台となるものが、彼らにとっての結婚なのだ。

「普通の結婚じゃだめなのか？」

「普通ってなに？ わたしたちが普通じゃないってこと？」

「いや、そうじゃないが……。ただどうしても、その共生婚とやらが幸せとは思えない」

「今のお父さんたちだって共生婚でしょ！」

美鈴は声を荒げた。私を睨むその眼には、憎しみと軽蔑の色が混じっている。

美鈴はまだ許していないのだ、私のことを。

あれはまだ、美鈴が高校生の時だった。私は妻子がありながら、会社の派遣社員の女性と深い仲になってしまった。その頃、美鈴が不登校になり、そのことで伸子も疲弊していたが、私も仕事に忙しく、かまってやれなかった。妻と口論することも増え、ストレスが蓄積した。その女性から飲みに誘われたのは、そんな時だった。以前から好意を抱いていたと聞かされ、悪い気はしなかった。逢瀬を重ねるうちに、とうとう二人の関係が会社にばれ、相手の女性が派遣契約を打ち切られ

ると同時に関係も終わったが、家族ぐるみで仲の良かった同僚の妻から、伸子にそのことが伝わり、美鈴までが知ることとなった。

「もう、別れちゃえば」

台所で伸子に向けて言った美鈴の言葉が偶然聞こえて、私は自分の犯した罪を恥じた。

だが、伸子は別れなかった。怒るでも責めるでもなく、まるで何事もなかったかのように私との生活が続けた。ただ、前みたいに笑うことや会話することは少なくなった。私は家族を裏切ってしまったことを後悔し続けながら、今も伸子と暮らしている。

それはまさに、美鈴の言う「共生婚」に他ならないのではないか。だが、私にはどうすればいいのかかわからない。

帰りは私の運転で、二人を駅まで送ることにした。伸子も一緒に行くという。車に乗り込む前、私は佐久間に声をかけた。

「たまには美鈴もキャンプへ連れて行ってあげ

てくれないか？」

「だから、わたしはキャンプに興味ないの！」

呆れたように笑いながら美鈴が割って入る。

「僕、この前キャンプ場で星空を眺めながら、きみにも見せてあげたいなって思ったんだ」

「そうなの？」

美鈴が、目を丸くする。

「うん、それに家族連れでキャンプに来ている人たちを見ると、楽しそうだなって。いつか僕たちもあんな風になればいいなって」

美鈴の目尻に、薄い皺が浮かぶ。

「娘のことを、よろしくお願いします」

私は、佐久間に頭を下げた。

駅に着いて車から二人の荷物を下ろしていると、美鈴が駆け寄ってきた。そして私だけに聞こえる声で「あること」を囁いた。一瞬、娘がなぜそんなことを言ったのか理解できず問いかけようとしたが、美鈴は自分の荷物を持ってさっさと行ってしまった。

美鈴たちの乗った電車を見送って帰る途中、私は助手席の伸子に声をかけた。

「ホームセンターに寄って帰ろう」

「何を買うの？」

「散水ノズルさ。庭のホースのノズルが壊れてるだろ」

伸子は驚いた様子で、ハンドルを握る私の横顔を見つめている。

「お母さんが、庭の花の水やりに困ってるんだって」

さつき、美鈴がそれを教えてくれた。私に対する気持ちに変化があったのか、或いは、ただ困っている母親を見かねただけなのか、それは分からない。でも、私は嬉しかった。

結婚する時、私は伸子と約束をした。何があっても、共に生きていこうと。伸子は律儀にその約束を守ろうとしているのだろうか。それとも、なにか別の考えがあつて、私と一緒に暮らしているのだろうか。

ふと、まだ恋人同士だった頃の伸子の声が、脳

裏に蘇る。

「もし裏切ったら、一生後悔させてやるから」

詩

ふるさと流星群

高知市 童 眼 まさみ

母親から届いたダンボール箱

封を解いてみたら

噴き上がる麦わら帽子の匂い

元気ぞね

母の声が夕焼け空に染みこんで

赤とんぼが目を回してしまう

気ばりゆうかよ

卒寿の激に背筋を正せば

卵かけご飯をかき込む幼子が見える

たまには帰ってきいや
いつの間にやら夜は更けて
仰げば満天の星たち
もうちつくと待とうせ
囁けば星が瞬く

眠りにつければ夢の中
夜汽車に乗ってふるさとを目指す
プラットホームに降り立つと
そよ風に包まれ
改札口には破顔の母
とたんに降りそそぐふるさと流星群

ありがとうせ
己の眩きに目を覚まし
しばし独りはにかむ

染める

高知市
おおたに
あかり

「手を染める　なのに
洗うのは足　なんですわね」
どこかで読んだ言葉が
私にこびりついて離れずにいる

なにがなんだかわからぬままに
三十八年生きてしまったけれど
私は、一体、何に染まっているのでしょうか

年を重ねれば重ねる程に　賢くなるより
口をつぐむ事が増え　こっそり頭をかしげる
そんな事が多くなり　その度ペンを握ってきたっけ

「手を染める」

本来は悪い意味だけではなく

「なにかを始める」

「なにかに取り組む」ということ

すてきな響き 「手を染める」

私は私に 手を染めて

これからは私をはじめていく

あつちこつち転げまわり 傷だらけ

慣れ親しんだこの身体

いつか この私から足を洗う日が

来るとしても

染まった指先くらいは 愛しく思いたい

言葉がはらはら こぼれおちていく様さま

思い描いて

今日もノートを開いて ペンを握る

私は私に 染まっていく

そう決めて

柿色の浴衣

高知市
赤
井
紫
蘇

おばあちゃん

もうだんだん弱っていつてよ
と言いながら母は

古い浴衣をほどこいている

施設はエアコンが常にオンやき

これを羽織に作り替えて

着せてあげようと思つてね

最近は一人でよう立たんようなつて

まあ このまま眠るようになつたら

年寄りにとつたらええ終わり方よねえ

庭の方を向いたまま

手を動かしている母は

畳の上に広がる浴衣に目もくれず

今度は自分をほどきはじめる

これよ この浴衣 いつのやと思う？

私がまだ中学生の時のやき

もう五十年近く昔！

みんな年取っていくのねえ

縫い糸に目打ちを引っかけると

母はするするほどけていく

できた！

これでやっとお祭り行けるわ

先に行っちゃよきね！

ほどけた母は柿色の浴衣になって

ふわふわと駆け出していた

糸に練られた思い出だけが

満足そうに沈んでいた

繕
う

高知市
都
築
悦
子

うす暗い電灯の下で
繕いものをする女たち
針は行ってもどつての繰り返し
糸をしごき縫い目を確かめる
破れた靴下は電球にかぶせて
傷んだ部分を丹念に繕う
一枚の布も一本の木綿糸も
粗末にせず大事にして
黙々と繕い物をする
女たちがいた

物が溢れ色彩が混じり合う

あつ この色いい こっちは今風だ

簡単に手に入れることができ

手間暇かけることを嫌う日常

山積みされた廃棄物に

鉤裂きのシャツを忍ばせる

繕う女たちに育てられ

確かにあつた時間を見てきたのに

個ではいられない場

あちらにもいい顔 こちらにも笑顔

傷の裂け目が深くなる

ちようどの布は見つけられないが

とりあえず被っておく

無理に繕う糸目は乱れるが

針を置いて私の一日を終わらせる

遠い風景になってしまった女たちも

密やかに傷を繕っていたのだろうか

傷ついた思いを懐深くしのばせて

坐していたのだろうか

40 Wの電灯 光の輪の下で

ポコちゃんのたんじょうび

高知市 栗山文子

パコくんにはめがない
でも みえている
ころころにうつるかたちやいろは
ゆびやことばでさがすから

ピコくんにはみみがない
でも きこえている
からだにたつたわるゆるるリズムは
そのままおんがくだから

プコくんにははながない
でも におっている

みんなのえがおやなみだは

いろんなかおりをかんじさせてくれるから

ぼくは ペコくとよばれている

じしんがなくてしたをむいているからかも
でも ともだちは4にんもいるんだ

きょうは ポコちゃんのたんじょうび

パコくんは おにわのはなを

ピコくんは いつもきいているレコードを

プコくんは てづくりプリンをもってきた

ぼくは うたをプレゼントすることにした

ポコちゃんにはくちがない

でも おしゃべりだ

やかましいくらいしゅわのゆびがうごくから

ぼくのへたなうたにあわせて

きつと おおきくうでがのびるだろう

泣いたやぎ

高知市
浜田健夫

メエーとやぎが鳴いている

毎朝誇らしげに鳴くのだ

彼女は父にしか乳房を触らせない

私は搾りたての乳を飲み

元気をもらった

だが、乳が出なくなると

父は肉屋に売ったのだ

「酷い、お父さんは信用できない、

私を使い捨てにするのね」

彼女は大声で泣いた

母は沈黙し、私は「イヤだ」と叫ぶ

父は「ダメだ、飼えない」と言って

空になったやぎ小屋を取り壊した
空き地に夕陽が差し込む
赤い夕陽は不気味だ

役に立たなくなるとこうなるのか
いくら泣いても もう遅い
牛だって馬だって同じなのだ
彼女は犬のエサにされるのだ

翌朝、ほんやりと庭に出ると
やぎはとぼけた顔で蓮華を食べていた
父は黙って首を撫でている
私が駆け寄って手を伸ばすと
彼女は天に向かい大きくメエーと鳴いた
「神様、有難う」
「また私のお乳を飲んでもらえます」

佳作五編

九十五歳の挑戦

南国市 宮本泰子

百年間筆筒に眠っていた祖母の着物を
自分の服に直して着たいと
私の工房に持ち込まれた

令和に目を覚まして歩こうとしている
ベージュ色の訪問着は
災難にも遭わずに生き残った
おばあちゃんはこれを着て何回か
披露宴に出席したのだろう
処々にある衣魚しみを見て思い浮かぶ

裾に大きなオレンジ色の木蓮
つくし タンポポ 桔梗 紅葉
青や白 オレンジ色の蝶
季節が入り交っているのは
永い間着られるようにだろうか

これを着て文学館へ行きたい
お客様の気持ちに応えられる様に
模様の配置を考え描いてみる
万太郎になった気分だ

前身頃には木蓮を右から左に
大きな蝶も飛ばして見る
後身頃にはつくしやタンポポ
小さい蝶は身頃と袖に甦らせたい
理想通りの位置に柄があれば良いが
配置が難しい
衣魚いひなの部分は除きたい

今迄何回か手掛けた事はあるが
これが人生最後の挑戦になるかも知れない
お客様が蝶と一緒に文学館へ飛んで
行く日を夢みて

空蟬のように

高知市 宮 地 令 子

早朝 テラスに蟬が仰向けになつていた
死んでいるのかな?と思ひながら
そつと ひっくり返すと なんと
あつと言う間に飛んで行つた
一瞬のことで面喰つてしまつたが
生きていてよかつたとほつとした

蟬が飛び去つた空を眺めていると
近くの山から 蟬時雨が聞こえてきた
蟬時雨を聞きながら ふと思う
蟬はいいなあ 身ひとつで飛び回り
いずれは何処かで一生を終えるから
なんて ちよつぴり羨ましく思つたりする
と言うのも この頃 折に触れては

自分自身の行く末のことを考えたりするから
今 雑誌などでも「終活」を取り上げていて
私も終活の記事には興味をそそられ

「よし 終活を始めてみよう」と意気込むが
これがそう容易なことではなく 何しろ
あれこれ欲張りに日々を過ごしているから
この気持は続かず 挙句の果てには

「まあ そのうちに」なんてことになり
終活のことはついつい後回しになっている

そんなこんなの日々だけど

いずれはきちんとしたいと思っているから
日常の中で色々なことに関心は向いている
今は蟬のこと 特に空蟬には思う所がある
蟬は地中から出ると空蟬を残して飛び去り
残された空蟬は木の幹や葉 草をつかんで
風に吹かれて軽やかに揺れている

そして 時を経て土へと戻ってゆくだろう
私はこんな軽やかな空蟬に心を惹かれる
だから 願わずにはいられない

早く終活をすませて その後の人生を
空蟬のように 軽やかに生きてゆきたいと

虹

高知市 大野充彦

大正生まれのオヤジに怒鳴られて
貴女と夜汽車に飛び乗ったボク

明け方の空を見上げると
きれいな七色の虹が出ていた
いいことがありそうだと思っただけ
乗り継ぎ切符は虹とともに
どこかに消えた

十九のボクは急ぐ振りして
駆落ちという言葉に悩み
カバンひとつを重そうに歩いた

チノパンが似合ってるわよと
貴女は言った

ボクは二十一歳の
約束にすがっていた

二人は愛という厄介を背負い

あの故郷にない道を

快哉の虹求め

どこまでも歩いた

まるでデモに参加しているように

律儀に歩いた

愛は一どきにつくるものではないと

夕日が笑っている

求めすぎたボクのスニーカー

高度成長期の身勝手

吉兆の虹はまだまだ遠い

ボクはあの時

いのち
生命を燃やす覚悟を知らなかった

言の葉

香南市 青野 紀代美

小さな舟を漕ぐ

ゆらゆらゆらと水面に浮かぶ

言の葉をすくってみる

すくっては 並べ 並べ替え

漕いで すくっては 並べ 並べ替え

すくった言の葉をもっていき

あの時の君にあやまりたい

短い言の葉をもっていき

あの時の君をほめてあげたい

並べ替えた言の葉で

あの時の君と泣きたい

浮かぶ言の葉を集めて
一生懸命集めて
たくさん集めて
君に
優しく
そっと わたしたい

アサガオ

高知市 甫 木 恵 美

鼻の奥のほうに何かがつーんときて
目頭がじわっと熱くなる

まぶたを閉じると流れ落ちる液体

油断すると

鼻水もたらーと落ちてきます

身体中のあちらこちらに溜まっていた分泌

物が脳に巡り回って

顔の表面に滲み出てくるような感覚なので
す

「日よけに植えたベランダのアサガオの花
が咲きました。」

短い文章で葉書を送ってくれたのが最期の

言葉となりました

もつとたくさん話をしたかった

今日も

起こった出来事を話しかけています

あなただったなら、こんな風に言うだろうと

想像しながら

あなたの顔や姿

話す声を思い浮かべると

鼻の奥のほうに何かがつーんときて

目頭がじわつと熱くなる

まぶたを閉じると流れ落ちる液体

おまけに

鼻水もたらーと落ちてきます

わたしの脳の司令塔は

今もまだ

あなたを追い求めて

何かしらキャッチして

反応しているのです

「今年もアサガオの花は咲いたでしょうか。」

短

歌

○高知県文芸賞一首

戦争洪水飢餓猛暑星の悲鳴をきけと蝉鳴く

須崎市

廣

見

正

子

○高知県文芸奨励賞五首

生きるのは食べることぞと嫗言ふ瘦せ地に挑みて節太き指

吾川郡いの町

西

原

時

子

このさきは何があつてもくじけないだつて僕には家族がいるから

香南市立赤岡中学校二年

多

田

蓮

潮騒を聴いてあなたは母となる日陰にビーチサンダルを干す

須崎市

土居

修

夏休み汗でびっしょり合唱部がんばりの汗キラリと光る

土佐市立高岡第一小学校六年

高

橋

ひかり

コンバインの爆音ならよし炎天の終戦記念日稲刈り始む

土佐市

池

田

育

子

○佳作五首

父の声母の声するダイヤルの電話機今も生家に座る

幡多郡黒潮町

松

岡

美代子

乗り過ごしししことには触れず留守番の夫を^{ねぎら}勞ひ夕餉作りぬ

高知市

中

山

恭

子

運動会放送係やりきった言いまちがえてこうかいもした

土佐市立高岡第一小学校六年

浜

崎

萌々香

背にリュック胸に子を抱き傘をさし雨の歩道を渡る母親

高知市 山下和代

居残りの短歌作りの教室の電波時計はゆっくり回る

安田町立安田中学校三年 大和田 奈都

俳

句

○高知県文芸賞一句

春の風弥勒菩薩の吐息かも

高知市 川戸右京

○高知県文芸奨励賞五句

蜉蝣やこの世かの世をゆきもどり

南国市 澤村正彦

蚊遣してこの世に父も母もなく

高知市 田村乙女

生きてこそ灯る門灯つづれさせ

高知市

田

村

土

木

窯を出て秋風を聞く壺の耳

安芸市

山

崎

葉

ドカーンと山からのぞく遠花火

土佐市立高岡第一小学校五年

鈴

木

優

那

○佳作十句

虫売りの椅子に古りたる資本論

高知市

栗

坂

海

馬

羊水のごとき水引く植田かな

高岡郡四万十町

藤

原

佳

代

子

昭和史のひとつに飯が饑えたこと

高知市

露

口

奈

津

子

もう水にほとほと飽きて水中花

高岡郡佐川町

駒

木

基

克

今生のいまおもしろく青瓢

高岡郡四万十町

中

平

キ

リン

大根蒔く畑にもありし設計図

幡多郡黒潮町

徳

廣

由

喜

子

訃がこつと色なき風に迷ひ来て

香美市

山

崎

鈴

子

魯穂に身の丈ほどの虚栄心

高知市

尾

崎

淳

めざましの音より早くセミの声

高知市立春野中学校二年

小

笠

原

龍

一

木々ゆらすいたずら好きな春の風

土佐市立高岡第一小学校六年

川

原

夏

梨

川

柳

○高知県文芸賞一句

源流が同じ滴の清と濁

高知市 山岡陸宏

○高知県文芸奨励賞五句

わたくしを我等にさせる助詞がある

高知市 大野早苗

ワンス・ア・イヤー命燃やせとツガニ汁

吾川郡いの町 渡邊ゆかり

大丈夫傘は家にも二つある

吾川郡いの町

岡

林

裕

子

曜日なき独居へ届く遠花火

高知市

富

士
田

三

郎

遠花火だけど心臓ゆれ動く

土佐市立高岡第一小学校六年

池

瑞

依

○佳作十句

面取りをすれば時間も柔らかく

高知市

近

藤

真

奈

金平糖不思議な角のものがたり

香美市

藤

村

る

み

別れゆく昨夜の歩調好きだった

高知市

大

野

充

彦

靡くしかないと考え輩になる

吾川郡いの町

森

乃

鈴

針金の捻ったやつを忘れまい

高知市

明

神

永

子

海月より気儘に浮いてキミは喜寿

南国市

山

崎

光

子

我らもう絶滅危惧種村の秋

高岡郡日高村

森

下

菊

夕暮れを引っ張ってきたオニヤンマ

土佐清水市

辻

内

次

根

上下と右と左に春の声

土佐市立高岡第一小学校四年

渡

邊

和

弥

白線とホイッスルの音ね風になる

清和女子高等学校二年

北之園

心

咲

審 查 評

短編小説審査評

今年の応募作品数は四十七編。十三歳から九十二歳まで、幅広い年齢層からの応募があった。今年には昨年よりも応募者が増えたが、学生の中から議論を呼ぶ作品が出てこなかったことは残念だった。また歴史を踏まえた作品の場合、出典を明らかにすることへの配慮も意見として出された。

今回も様々な作品が机上に上がったが、審査の結果、次の五作品を入賞とした。

文芸賞「またね」は、何気なく使っているこの三文字の持つ重さ、残酷さを浮き上がらせた作品。オーストラリアに留学したことで親密になった韓国人のテヨンとジウ。帰国してからも二人との連絡の最後に必ずつけていた「またね」の文字。再会を願う言葉だ。だがそこへ、突然ジウが自死したという知らせを受ける。その理由は分からないが、今は既にそれぞれの人生を歩んでいることを自覚するのだった。繊細で透明感のある作風で、一人の死が持つ大きさを印象深く描いた。

奨励賞一席「草原の絵葉書」。母一人子一人で暮らしてきた親子。母親の言うことを忠実に守ってきた息子だったが、大学卒業をあと一年というところで農業をしたいと言

い残し、家を出てしまう。実母を迎えに来た空港で息子の友人とばったり出会い、これまでの子育ての事、息子の事を思う母。到着した実母から手渡された、息子からの手紙の束。息子と正面から向き合おうとする母の姿を描いた。読みやすい文体で構成力もある。子育てへの自省の念は共感を呼ぶ内容でもあった。

奨励賞二席「庭」。一人娘紗耶香と夫婦の三人家族。小学校教師をしていた妻は念願の中庭付き新居を建て、幸せな時間を過ごしていた。だが、まもなく妻はガンを発症。余命数カ月となる。冒頭とラストは医化学の研究に励んでいる現在の紗耶香と、父英介とのやりとりで構成。母親亡き後も父子の関係を深めていることがおのずとわかる。文章も確か。感傷に流されていない点も評価された。

佳作二点。合歓の木の洞に、祖母が隠した小箱。若くして戦死した夫への思いを封じ込めた「合歓の木」。過去に浮気した経緯を持つ夫。妻との会話のずれから始まる「結婚とは」。共生婚という形の結婚をするという娘にも現代の縮図があったが、最後の一行に注文が出た。

他にも「無窮花」(矢野富久味)、「法要」(内山真知子)、「白狸の油」(山本勇弥)、「順刀」(元久雄太)らの作品が議論となった。

(審査員——杉本雅史、若江克己、文責・米沢朝子)

詩審査評

応募数五十五篇。文芸賞は、童眼まさみ『ふるさと流星群』。幸福な光景とも思えるが、内実は、高齢化の問題や、

さまざまなことを含んだのか。「赤とんぼが目を回してしまふ」の一行が、すぐには飲み込みにくい、「元氣ぞね」という母の声が伝わってくる作者自身の感動を、赤とんぼに委ねたと解釈した。容易に帰れないふるさと、夢でも帰りたいふるさと。「独りにはかむ」という表現から、色褪せることのない母と子の姿が見えてくる。なお、言いたいことが簡潔明瞭であり、タイトルが詩をうまく生かしている、という意見もあった。読後に訪れる温もりがこの詩の魅力である。

奨励賞は五篇。おおたにあかり『染める』。「手を染める」から「足を洗う」までの距離感の中に、自らの人生の陰影を滲ませようとしている。このような書き方も有効である。ここに描かれている出来事は、誰にも起こり得ることである。生きるということの意味を問う普遍性のある詩である。

赤井紫蘇『柿色の浴衣』。「自分をほどきはじめる母」、

人生には必ずそのような時がくる。「できた！これでやっとお祭り行けるわ」ほどけた母は、柿色の浴衣になつて、ふわふわと駆けだして行く。不思議な味わいのある詩である。

都築悦子『繕う』。昔の女性の衣服の繕いから、現代の人たちの心の傷の繕いへとつながる、想像力の往還がよいとの意見もあった。この作品は、生きるということの難しさ、切なさを吐露したかったのだろう。

栗山文子『ポコちゃんのたんじょうび』。「面白い着想によつて出来上がった即興の詩」との評価もあった。詩の構想力という意味ではすぐれていると思う。言葉を遊ばせる巧みさという点から見ても個性的である。様々な素材を書き分けることを試みていくと、よりよくなるはずである。

浜田健夫『泣いたやぎ』。寓話としての一篇と解すればよいのだろうか。思い切った展開の作品である。前半のストーリーやセリフの運びに整理不足があり、救われたやぎの姿が腑に落ちにくかったことが惜しまれる。

なお、佳作にも、良い作品があったことを記しておきたい。

(審査員——林嗣夫、やまもとさいみ、文責・増田耕三)

短歌審査評

今年の応募者は二百十名、歌は四百七十首で昨年より増加。年齢は十一歳から九十五歳。学校は、小学校一校、中学校四校、高等学校二校から応募校も増。短歌の拮据を実感すると共に先生方の努力にも感謝である。慎重に審査し、以下の六首を入賞とした。

文芸賞

戦争洪水飢餓猛暑星の悲鳴をきけと蟬鳴く

廣見 正子

地球温暖化は人類の欲望が引き起こしたものである。上の句にその原因や現象なるものをリズムよく並べ、強力にアピール。一転、結句では怒りを抑え、小さな蟬に抗議の声を託した。人類の大きなテーマであることに共感し、選者そろっての選となった。

文芸奨励賞

生きるの食べることぞと囁言ふ痩せ地に挑みて節太き指
西原 時子

かの大戦を生き抜いた人の言葉は重い。囁の発した言葉は勿論のこと、節太き指にしみじみと生きることの厳しさを見ている。囁への労りと平和への想いが伝わる作品。

このさきは何があってもくじけないだって僕には家族

がいるから

赤岡中・多田 蓮

温かな家庭が目につかぶ。目を覆いたくなるような事件や事故の多い昨今に、この歌の素直さがひと際明るくさわやかである。

潮騒を聴いてあなたは母となる日陰にビーチサンダルを干す
土居 修

新しいのちの誕生を待ちわびる温かい作品。夏の太陽と穏やかな潮騒の音、そしてビーチサンダル。何気ない日常のひとコマ。普通であることが仕合せなのだ。

夏休み汗でびっしょり合唱部がんばりの汗キラリと光る
高岡第一小・高橋 ひかり

夏休みのクラブ活動を汗まみれになりながら一生懸命頑張った。すなおな言葉に共感。「がんばりの汗」がまぶしい。

コンバインの爆音ならよし炎天の終戦記念日稲刈り始む
池田 育子

終戦記念日にコンバインの爆音を響かせて稲刈りをしている。戦争の犠牲者に想いを馳せつつも、平和ならではの風景。

佳作（五名）

松岡美代子、中山恭子、浜崎萌々香（高岡第一小）、
山下和代、大和田奈都（安田中）

（審査員——梶田順子、中野百世、文責・山脇志津）

俳句審査評

高知県芸術祭の俳句が出揃いました。

応募句数七百十七句。参加者年齢、最高九十五歳、最年少十歳の方々の熱い思いの句群で（一般、百十六名。学生、百十二名。）

例年の如く予選を持ち寄り入賞句が決まりました。

「文芸賞」

春の風弥勒菩薩の吐息かも

川戸 右京

揺蕩う春風のやさしさを表現していて、その風があなたかも弥勒菩薩の吐息のようだ…と格調高く詠い上げている。作者の待春の思いと相俟って心にひびいてくる。

「文芸奨励賞」

蜉蝣やこの世かの世をゆきもどり

澤村 正彦

蜉蝣はトンボの古名。飛ぶさまが陽炎のひらめきにも似て、儚げに見える。あたかもこの世と次の世へ……。

蚊遣してこの世に父も母もなく

田村 乙女

蚊取線香の渦巻がなつかしい。線香の匂いが立ちこめる夕暮刻、そこには賑やかに家族が居た。そのよき時代の夏

の夕べを個々の記憶の中から拾い上げての一句に共鳴。

生きてこそ灯る門灯つづれさせ

田村 土木

外灯や部屋の明りさへも暗くした時代があった。そんな昔を知る人も少なくなつた今、明明と点る門灯に生への感謝を詠う。素朴で一本気な俳句の世界がここにある。

窯を出て秋風を聞く壺の耳

山崎 葉

沈着な秋風裡の一句。一読して素焼きの大きな壺を想起した。把手を壺の耳と言いつて妙。静寂な時間の中にいつでも立ち尽くしたのでしょう。

ドカーンと山からのぞく遠花火

鈴木 優那

花火大会の一風景。鏡川花火大会の遠花火であろうか。素直に且つ大胆に詠い上げている。遅れて届く花火の音が聞こえてくるようだ。

「佳作」

栗坂海馬、藤原佳代子、露口奈津子、駒木基克、

中平キリン、徳廣由喜子、山崎鈴子、尾崎淳、

小笠原龍一、川原夏梨

（審査員——橋田憲明、味元昭次、文責・植田紀子）

川柳審査評

今年の川柳部門の応募総数は五百六十一句で、一般の応募が昨年より多かった。今年の応募作品には、ロシアのウクライナ侵攻から始まる世界の不安定さを題材にした作品、物価高、らんまんに沸いた高知県の句も目についた。その一方で、日常の中での想いを十七音字で表現した素敵な作品に出会えた。

今年もジュニアのたくさんのお応募があった。小学生のはつとする発想、高校生の今を感じる事ができた。慎重に審査にあたり、次のように受賞作を決めた。

文芸賞は次の一句。

源流が同じ滴の清と濁

山岡 陸宏

源流のひとしづくから、四万十川も仁淀川も始まる。大河はそこから物語を始める。清流と呼ばれる時もあるれば、人を恐れさす濁流となることもある。人もまた、生まれる時はみんなに祝福され、将来を期待される一瞬から始まる。清らかな時ばかりではないのが、川も人もまた同じ。始まりは一緒、そして清も濁もあるそれぞれの物語となる。

次に、文芸奨励賞。

わたくしを我等にさせる助詞がある

大野 早苗

言葉と言葉をつなぐ助詞を私たちは持っている。巧みな接着剤の役割で、助詞一つの違いで短詩は生き生きとしてくる。世界が騒がしい。民族、宗教、政治体制の違いをつなぐものはないだろうか。違いは違いとして、我等という呼び方はできないだろうか。

ワンス・ア・イヤー命燃やせとツガニ汁

渡邊 ゆかり

高知県の郷土料理のツガニ汁。四万十川と仁淀川では秋に、このツガニ汁を食すことができる。川蟹とは思えない郷土の素敵な味に、命が燃えてくるような気になる。一年に一回はツガニを味わう、この土地に根差してこれからも生きてゆくつもり。

大丈夫傘は家にも二つある

岡林 裕子

忘れることが多くなつた。私はそれを嘆かない。外出先で傘を忘れてきても後悔しない。どうせ傘は傘、かわりはいくらでもある。私は前を向いて生きてゆく。細かなことは適当に忘れてゆく。いのちがあれば、ほかのことはまあまあでいい。

曜日なき独居へ届く遠花火

富士田 三郎

一人暮らしを続けていると、曜日は関係がなくなる。子どもがたまに訪ねてきたら、日曜日なのかと思う。空の向うに小さな花火があがる。偶然目についた。難聴の耳には当然音は聞こえない。今年の夏の最高のプレゼントにしばらく釘付けになった。

遠花火だけど心臓ゆれ動く

池 瑞依

真上に上がる花火の迫力もいいが、私は遠くに見える花火にも心臓がどきどきするほど興奮する。花火が消えたあとに聞こえる大きな音に、心臓と一緒に揺れているような気分になる。花火も大好き、いろんなことに私は感動する。

(審査員——清水かおり、文責・小笠原望)

令和五年度高知県文芸賞 作品募集要項

五、締切日

令和五年九月二十九日（金）当日必着

一、趣旨

高知県文芸賞は、広く県民の皆様から作品を公募して、すぐれた作品を顕彰し、地方文化の発展と本県文芸の振興を図ることを目的としています。

六、作品送付先

〒七八一―八一二三 高知市高須三五三二一

（公財）高知県文化財団内

「高知県芸術祭執行委員会事務局」あて

二、主催

高知県・（公財）高知県文化財団

七、発表

令和五年十一月上旬に本人及び報道機関あてに通知します。（令和五年十二月十日に表彰式を行います。）

三、主管

高知県芸術祭執行委員会

八、選賞

（事務局（公財）高知県文化財団内）

・短編小説

「高知県文芸賞」一名

「高知県文芸奨励賞」二名

・他の部門

「高知県文芸賞」一名

「高知県文芸奨励賞」五名

その他、佳作が選出される場合もあります。

受賞者には表彰状と副賞が授与されます。

四、公募作品の部門

短編小説 一人一編

詩 一人一編

短歌 一人三首以内

俳句 一人五句以内

川柳 一人五句以内

九、応募時の注意事項

・類似（類想） 作品の存在が明らかになった場合や、盗作が疑われる場合は、賞の発表後でもこれを取り消すことがあります。その場合に発生した著作権侵害に関わる問題は、応募者の責任となります。また、取り消しにより生じた損害（経費）については応募者に負担していただきます。

十、応募条件

未発表作品に限り、応募者は高知県在住者に限ります。

* 私的な会や学習会で発表した作品、メンバー内での回覧、資料とするための目的で活字化した作品は「未発表」とみなします。

* その他、前記の基準等に則して、事務局が判断する場合もありますので、ご了承ください。

十一、作品への記載事項

① 部門名 ② 氏名（フリガナ） * ペンネームご使用の場合は併記 ③ 住所 ④ 電話番号 ⑤ 年齢
を必ず明記してください。記載場所等は部門ごとに異なります。

鉛筆またはシャープペンシルの場合は、HB以上で濃くはつきり書いてください。

十二、部門ごとの注意事項

短編小説

■ 作品本文は四百字詰原稿用紙十枚。

■ パソコンの場合、二十字×二十行で設定してください。

■ 必ず、作品本文にページ番号をふってください。

ホッチキス留めは不要。

・ 一枚目・タイトルを明記

・ 二枚目～十一枚目・作品本文

・ 十二枚目・部門名・氏名・住所・電話番号・年齢を明記。

詩

■ 作品本編は四百字詰原稿用紙二枚、三十七行以内。

・ 一枚目・一行目上方に部門、作品名、二行目下方に氏名を明記。

（三行目はあけて）四行目から本文を書き始めてください。

・ 三枚目・住所・電話番号・年齢を明記。

短歌・俳句・川柳

■通常はがきを使用してください。

※学校から、まとめて応募の場合は、はがきサイズの用紙へ記入しても可。

その際、ご担当教諭名を封筒に記入してください。

■全部門とも自由題。作品は楷書・タテ書きで書いてください。

・はがき表面に部門名を必ず記入してください。

・氏名・住所・電話番号・年齢は作品末尾に記入してください。

*応募作品は返却しません。

*個人情報、運営上の管理及び本人への連絡の用途に限り、利用させていただきます。

ただし、入選作品については、在住市町村名、氏名、年齢を公表します。

三、審査員(五十音順)

短編小説	杉本 雅史	米沢 朝子	若江 克己
詩	.. 林 嗣夫	増田 耕三	やまもとさいみ
短歌	.. 梶田 順子	中野 百世	山脇 志津
俳句	.. 植田 紀子	橋田 憲明	味元 昭次

川 柳・小笠原 望 清水 かおり

四、問い合わせ先

「高知県芸術祭執行委員会事務局」

(公財) 高知県文化財団内

(TEL) 〇八八―八六六―八〇一三

二〇二三年十二月十日 発行

編集発行 高知県芸術祭執行委員会

事務局 高知市高須三五三―二

(公財) 高知県文化財団内

印刷所 高知市城山町三六

西 富 贍 写 堂

(非 売 品)

